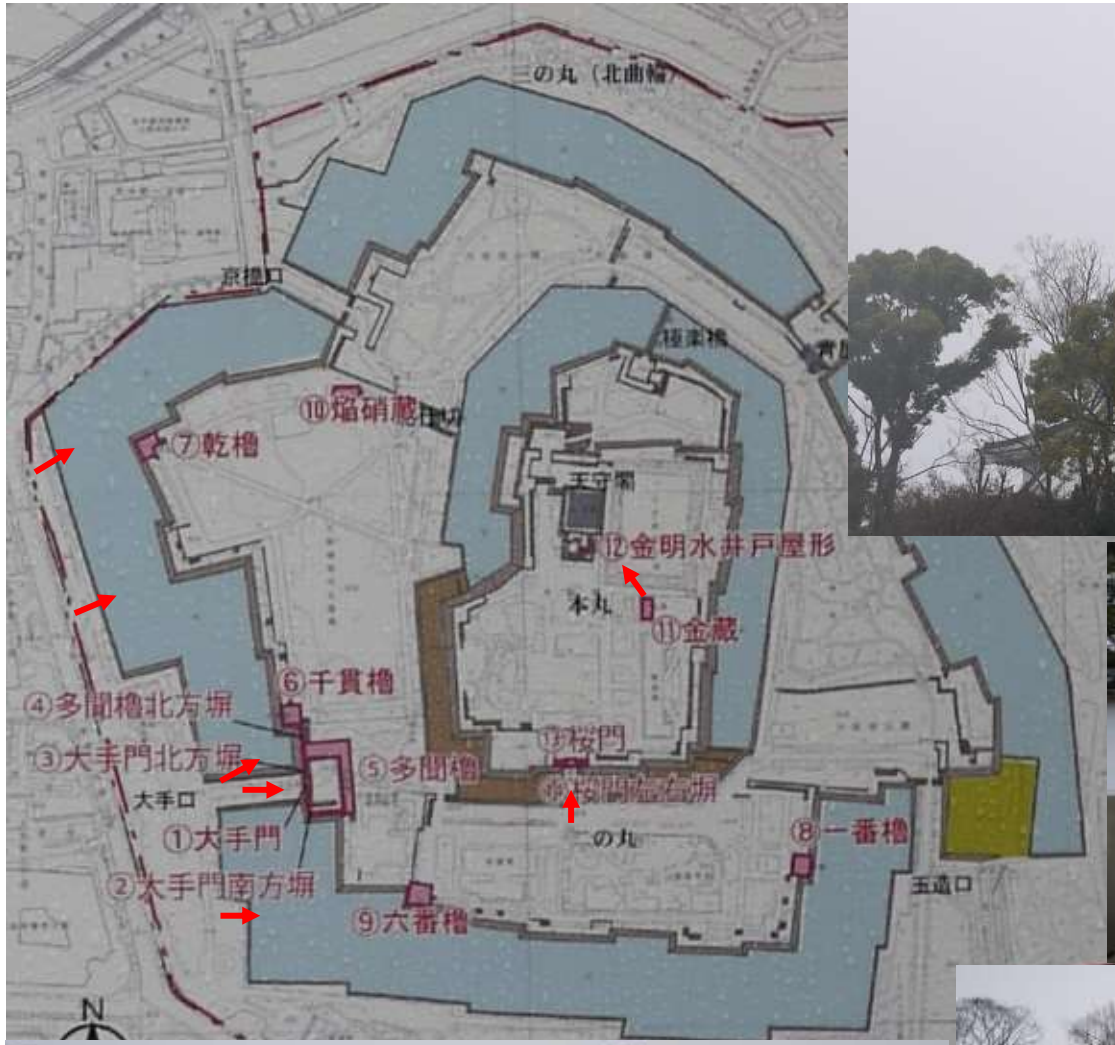
年末に雨の大阪城を歩いてきました

乾櫓

天守閣遠望

千貫櫓(左)と多門櫓(右)



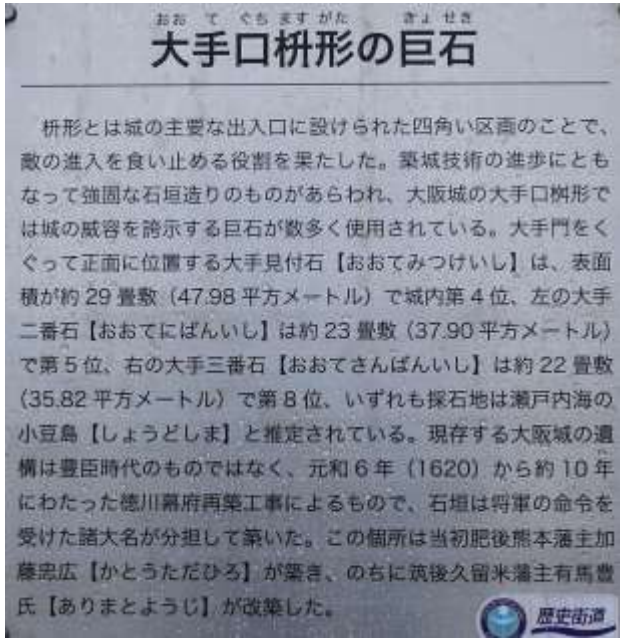
天守閣

桜門

大手門

六番櫓

大手口枡形の巨石



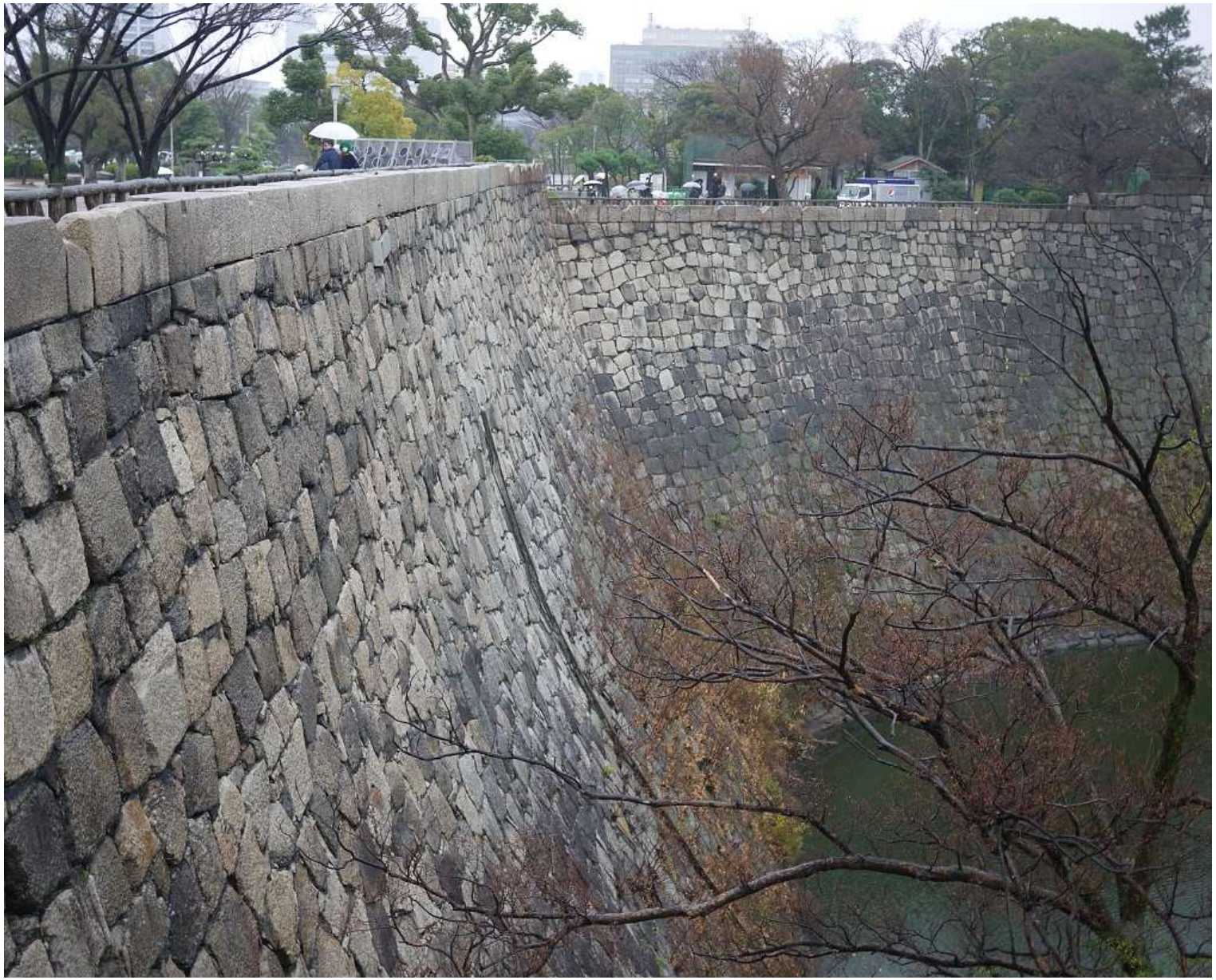
大手口枡形の巨石

枡形とは城の主要な出入口に設けられた四角い区画のことで、敵の進入を食い止める役割を果たした。築城技術の進歩にともなって強固な石垣造りのものがあらわれ、大阪城の大手口枡形では城の威容を誇示する巨石が数多く使用されている。大手門をくぐって正面に位置する大手見付石【おおてみつけいし】は、表面積が約29畳敷（47.98平方メートル）で城内第4位、左の大手二番石【おおてにばんいし】は約23畳敷（37.90平方メートル）で第5位、右の大手三番石【おおてさんばんいし】は約22畳敷（35.82平方メートル）で第8位、いずれも採石地は瀬戸内海の小豆島【しょうどしま】と推定されている。現存する大阪城の遺構は豊臣時代のものではなく、元和6年（1620）から約10年にわたった徳川幕府再築工事によるもので、石垣は将軍の命令を受けた諸大名が分担して築いた。この個所は当初肥後熊本藩主加藤忠広【かとうただひろ】が築き、のちに筑後久留米藩主有馬豊氏【ありまとようじ】が改築した。

歴史街道

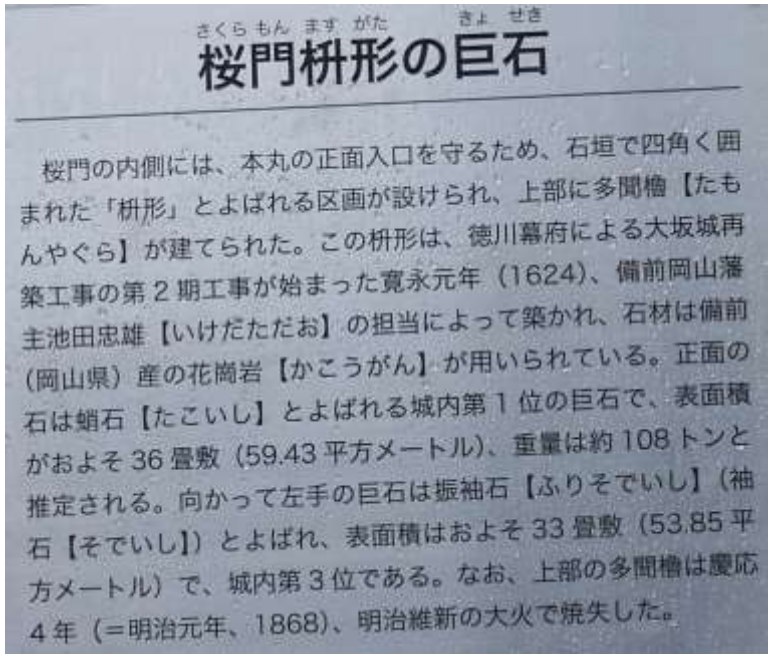
美しい石垣

多門櫓から桜門へ至る途中の空堀



天守閣から西側の内堀

桜門枡形の巨石



桜門枡形の巨石

桜門の内側には、本丸の正面入口を守るため、石垣で四角く囲まれた「枡形」とよばれる区画が設けられ、上部に多聞櫓【たもんやぐら】が建てられた。この枡形は、徳川幕府による大坂城再築工事の第２期工事が始まった寛永元年（1624）、備前岡山藩主池田忠雄【いけだただお】の担当によって築かれ、石材は備前（岡山県）産の花崗岩【かこうがん】が用いられている。正面の石は蛸石【たこいし】とよばれる城内第１位の巨石で、表面積がおよそ 36 畳敷（59.43 平方メートル）、重量は約 108 トンと推定される。向かって左手の巨石は振袖石【ふりそでいし】（袖石【そでいし】）とよばれ、表面積はおよそ 33 畳敷（53.85 平方メートル）で、城内第３位である。なお、上部の多聞櫓は慶応４年（＝明治元年、1868）、明治維新の大火で焼失した。

大阪城天守閣

現在の天守閣は昭和6(1931)年,「大阪夏の陣図屏風」に描かれた豊臣時代の天守を参考に建設された. SRC造でわが国の復興天守第1号である. 復興時から博物館施設として利用され, 第二次大戦の空襲でも焼失を免れた. (現地の説明書の一部を転載)